

# PAC 分析を用いた特別な配慮が必要な 交換留学生受け入れについての考察 — 障がいを伴う病気を持った交換留学生のケース —

## PAC Analysis on an Incoming Exchange Student with Special Needs:

### The Case of a Student with Disability

岡 部 真理子

OKABE Mariko

#### 要旨

協定校の増加に伴い交換留学生の派遣・受け入れが広がるとともに、本学ではさまざまな国から交換留学生を受け入れる機会が増えている。病気を持つ学生や身体的な障がいを持つ学生、自閉症スペクトラムの学生など、これまであまり受け入れた経験がなかった特別な配慮・支援を必要とする交換留学生がここ数年で着実に増えてきている。そのような留学生に対するケアをどのようにするかは手探り状態であり、これからノウハウを蓄積していかなくてはならないという状態である。

本研究では、身体的障がいを伴う病気を持って日本への留学を果たした交換留学生に協力してもらい、PAC（個人別態度構造）分析を行った。PAC 分析の結果、参与観察の記録、半構造化インタビューのデータから、この留学生にとって日本への留学がどのような意味をもっていたか、またどのようなサポートが必要だったか、実際にどのようなサポートが役に立ったかを探り、今後の留学生へのサポート体制を構築していく上での資料とすることを目的とする。

#### 1. はじめに

海外の大学との交換協定の締結や奨学金の充実により、交換留学生として日本の大学に受け入れられる学生の数は増加している。外国の高等教育機関で学ぶ学生が日本の大学に交換留学生として受け入れられるチャンスが増えたことは、日本を訪れる外国人留学生にとってのみでなく、交換留学生として海外に派遣される日本人学生にとっても、また、外国人留学生を受け入れる日本の大学で学ぶ日本人学生にとっても国際理解の機会を得るという点でいいことであると思われる。

本学でも英語圏、アジア圏の大学と交換協定を結び、交換留学生を受け入れるとともに、本学の優秀な学生に英語圏、アジア圏の大学に半年から一年間留学する機会を提供している。交換協定の内容は、概ね受け入れ大学での学費不徴収という条件を含み、ほぼ同

数の学生を交換留学生として派遣・受け入れをする学生の等価交換である。

協定校の増加に伴い交換留学生の派遣・受け入れが広がるとともに、本学ではさまざまな留学生を受け入れる機会が増えている。協定書にも、人種、宗教、障がい、年齢、出身国、国籍、性別、信条など、いかなる条件によっても交換プログラムへの参加を拒否しないとする趣旨の文言を明記するケースが増えてきている。海外の障がい者に対する機会均等の動きとともに、さまざまな持病や障がいを持つ学生が交換留学生として日本を訪れることも珍しくなくなってきており、今後、さまざまな交換留学生を受け入れる可能性がある。

本学においても、これまであまり受け入れたことがなかった持病を持つ学生や身体障がい・発達障がいを持つ学生を受け入れるケースがここ数年で増えてきているが、そのような学生に対する支援をどのようにするかは手探り状態であり、これからノウハウを蓄積していかなくてはならないという状態である。

本研究では、日本への留学半年前にある病氣と診断されたが、本学への交換留学を果たした学生ローズ（仮名）に協力してもらい、彼女にとって日本への留学がどのような意味をもっていたか、また彼女にとってどのようなサポートが必要だったか、実際にどのようなサポートが役に立ったかを探り、今後の留学生へのサポート体制を構築していく上での資料とすることを目的とする。

## 2. 背景

2006年に国連で「障害者の権利に関する条約」が採択され、日本も2007年に署名、国内での法整備を進め、2014年に批准に至った。2016年4月には「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」（障害者差別解消法）が施行され、大学等において、障がいのある学生の就学機会の確保が求められるようになった。

日本学生支援機構が行っている実態調査の報告書によると、日本の大学、短期大学および高等専門学校を対象とした調査では、障がいを持つ学生数は2015年度は21,721人で全学生数の0.68%、障がいのある学生が在籍している学校数は1,182校中880校で74.5%となり、いずれも前年度から大きく増えている（日本学生支援機構 2016）。

一方、留学生の状況について見てみると、障がいを持った留学生がどの程度増えているかの統計的な数字は筆者の知る限りではないが、日本語教育の分野においてさまざまな障がいを持つ学習者を対象とした取り組みの報告が近年見られるようになった（(池田 2004、上田 2003、北川 2014, 2015、坂根 2000、中川 2009)）。日本国内では障がいを持つ学生への支援体制の整備が進んではいるが、障がいを持つ留学生への対応については、大学全体での組織的対応はあまり進んでおらず、担当教員や担当部署での工夫と配慮に任されているところが大きい（井村 2007）。本学でも、外国人留学生、特に交換留学生の場合、学生の日本語力の問題や、留学生の所属大学とのやりとりや支援依頼文書などが英語である場合が多いことから、国際交流の担当部署が支援を担っている現状がある。支援技術を持った教職員や専任のスタッフがいない中、各留学生のケースごとに関係部署や授業担当教員との連携を模索している。

特に欧米諸国からの交換留学生の場合、母国で多種多様な支援を当然のこととして受けてきた留学生が日本でどのような支援を必要としているかについては、留学生によっても異なることが予想され、ノウハウの蓄積が必須であると考えられる。

### 3. 研究の方法

#### 3-1 研究協力者

研究協力者ローズ（仮名）は、英語圏の大学から1年間本学に交換留学生として滞在した学生である。交換留学の申し込みの際に本人から病名やどのような症状があるかの申告があった。前もって交換留学のコーディネーターと本人との間でメールのやり取りがあったほか、ローズの所属する大学の障がい者支援の部署からは、留学生の病名、症状の程度、どのような時に症状がひどくなるか等の情報とともに、留学前の時点でローズに対してどのような配慮をするよう支援要請文書が送られてきた。

- ・階段の昇降が難しい場合があるため、教室への移動にはエレベーターが使用可能な状態であること
- ・授業、授業での課題やテストについて次のような配慮をすること
  - 授業の講義ノートやスライドなどへのアクセス
  - 授業への欠席・遅刻への配慮
  - 授業間の移動の際の十分な時間の確保
  - 週の半ばに1日の休みが取れるようなスケジュール調整
  - 授業中、教室内の移動を最小限にする配慮
  - 宿題・課題の締め切りの延長
  - 定期試験やクラスでの小テストについての時間延長や実施方法などの配慮

ローズ自身からは、ここにあげているすべてを要求しているわけではなく、自分の状況を受け入れ側である本学の関係者に知っておいてもらいたいという旨の連絡が入っていた。

ローズの持病は、それ自体は命に関わる病気ではないが、さまざまな症状を引き起こし、生活のクオリティに著しく影響を与える疾病である。原因がまだ特定されていないため、根本的な治療が見込めず、痛みなどの症状を緩和する対処的な治療を受けるしか方法がない。ローズの場合、不眠、頭痛、倦怠感、両手首と足の痛みなどを伴い、手首の痛みのために書くことが難しい、あるいは非常に時間がかかることがあり、足の痛みのために移動には常に杖を使用していた。さらにこれらの症状をコントロールするために何種類もの薬を服用しなければならず、その薬には記憶力が著しく低下するという副作用もあった。症状は日によって違い、比較的軽い日もあるが、症状が軽い日であっても痛みがまったくなくなることはないということだった。

### 3-2 手続き

来日当初から日本語プログラムのコーディネータ、および交換留学生受け入れ担当として参与観察を行い、留学期間の終盤に PAC 分析、帰国直前に半構造化インタビューを行った。参与観察は2015年8月から2016年7月まで、PAC 分析は2016年3月、半構造化インタビューは2016年7月の帰国直前に行った。PAC 分析の結果を本研究の主なデータとし、参与観察の記録、半構造化インタビューの文字化資料を、考察を行う上での補助的なデータとして扱う。

PAC 分析の PAC とは、Personal Attitude Construct の略称で、PAC 分析は、個人別に態度構造を測定することを目的に内藤 (1993) によって開発された手法である。この分析は、当該テーマに関する自由連想 (アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する、質的分析と多変量解析 (クラスター分析) を組み合わせた方法である (内藤 1993)。

ローズの場合、書くという作業が難しい場合があるため、データ収集には PACAssist<sup>1</sup> を使用し、コンピュータの画面に従って入力してもらう方法を用いた。またクラスター分析には統計ソフトの HALBOU 7 を使用した。ローズには3回、各1時間程度データ収集に協力してもらった。1回目と2回目は2016年3月に、3回目は2016年7月に行った。

具体的な手順は次のとおりである。

- 1 回目： まず連想刺激文を日本語と英語で示し、そこから連想されることがらを想起順に入力してもらい、その後重要度を入力してもらった。自由連想は日本語でも英語でもかまわないとし、ローズは英語で連想語を入力した。連想項目を重要度順に並び替えた後、ローズに PAC-Assist の画面の指示に従ってコンピュータ上で連想項目間の類似度を 1 (まったく関連性がない) ~ 7 (強い関連性がある) のスケールで、カーソルを左右に動かすというかたちで評定をしてもらった。

#### 連想刺激文

日本に来る前、交換留学生として来日するというのは、あなたにとってどんなイメージがありましたか。今はどんなイメージを持っていて、日本への留学はあなたにとってどういう意味があると感じますか。また、日本で交換留学生として生活する中で、どんなサポートが必要だと感じますか。思いついた順に、単語か短い文で入力してください。英語でも日本語でもかまいません。

What image did you have before coming to Japan toward coming to Japan as an exchange student? What image do you have now, and what does coming to Japan as an exchange student mean to you? What kind of support do you feel you need living in Japan as an exchange student? Write down in words/phrases/short sentences in the order they come up in your mind. You may write either in

English or in Japanese.

2 回目：ローズから得られた連想項目間の類似度評定を非類似度距離行列によるクラスター分析にかけ、作成したデンドログラム（樹状図）をローズ自身に解釈してもらった。言語は日本語でも英語でもかまわないとしたが、ローズは日本語で答えていた。インタビューの最後で英語に切り替え、言い残したことや日本語では表現しきれなかったことがなかったかを英語で確認した。

3 回目：今回の留学全般について半構造化インタビューを行った。細かい部分での確認等が必要な部分については、英語でインタビューを行った。

## 4. 結果と考察

### 4-1 結果

連想刺激文によってローズが自由連想した項目を想起順に表 1 に示す。右に示した数字はローズによる重要度の判定である。

表 1 ローズによる自由連想項目（想起順）

想起順	自由連想語／文	重要度
1	a new beginning but also pressure to be a perfect student (新しい生活の始まりだが、完璧な学生になるというプレッシャーもある)	19
2	new people and new places but also no friends I know (新しい友人、新しい場所、だけど知っている友人は一人もない)	18
3	lots of study and homework (勉強と宿題がたくさんある)	12
4	making mistakes every day and trying to do better tomorrow (毎日失敗して、次の日はもっとがんばろうと思う)	1
5	making friends is no easier or harder than back home (友人を作るのは、母国にいる時よりっも難しい)	17
6	still lots of study and homework (今でもまだ勉強と宿題がたくさんある)	13
7	also a lot of socializing (勉強だけでなく、人とのつきあいがたくさんある)	14
8	friends and enemies are found in surprising places (友達や敵対者は思わぬところにいる)	5
9	the people and places changed but I am still the same me (まわりの人や場所は変わっても、私は変わらない)	4
10	you are different all the time (いつも自分が思う自分とは違ったように捉えられる)	9
11	people expect you to not understand (日本人は外国人が日本語を理解できないと思っている)	11
12	you aren't You, you're (Nationality) You (自分自身ではなく、〇〇国人の自分になる)	10
13	learning to embrace mistakes and failure (失敗を受け入れる)	2

14	the more you fail the better success feels (たくさん失敗すると、成功した時の喜びが大きい)	3
15	help meeting more people (if you're shy) (たくさんの人と知り合うためのサポート)	16
16	someone to tell worries or problems to (悩みや問題を相談できる誰か)	15
17	friends are important for international students (外国人留学生にとって友達は大切である)	6
18	especially other internationals who feel the same worries (特に同じ思いや悩みを共有するほかの外国人留学生の友人は大切である)	7
19	medical support (one less thing to worry about) (医療支援 悩みをひとつ減らすことができる)	8

(日本語訳：筆者)

ローズが自由連想した項目のうち、重要度が高いと判定された7項目を表2に示す。

表2 ローズによる自由連想項目 (重要度順)

想起順	自由連想語／文	重要度
4	making mistakes every day and trying to do better tomorrow (毎日失敗して、次の日はもっとがんばろうと思う)	1
13	learning to embrace mistakes and failure (失敗を受け入れる)	2
14	the more you fail the better success feels (たくさん失敗すると、成功した時の喜びが大きい)	3
9	the people and places changed but I am still the same me (まわりの人や場所は変わっても、私は変わらない)	4
8	friends and enemies are found in surprising places (友達や敵対者は思わぬところにいる)	5
17	friends are important for international students (外国人留学生にとって友達は大切である)	6
18	especially other internationals who feel the same worries (特に同じ思いや悩みを共有するほかの外国人留学生の友人は大切である)	7

連想項目間の非類似度距離行列をクラスター分析(ウォード法)にかけ、デンドログラム(樹状図)を作成した(図1)。

クラスター構造の解釈については、筆者の想定したクラスター構造の解釈をもとに、各クラスターの項目を読み上げ、ローズの持つイメージや解釈を報告してもらい、ローズの持つクラスターのまとまりが一致するかを確認した。

全体が大きく二つのクラスターに分かれることについてはローズと筆者で一致したが、クラスター1、クラスター2は、ともにローズによるとさらに2つの小さいクラスターに分かれるということであった。

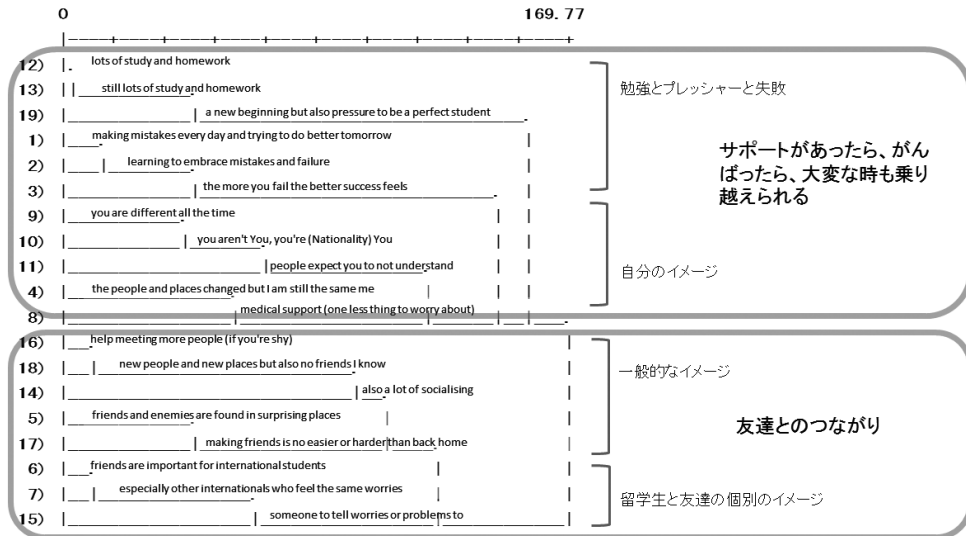


図 1：ローズのデンドログラム

左側の番号は重要順位

#### 4-2 ローズによるクラスターの解釈

ここでは各クラスターについてローズ自身が語ったことばから、ローズが各クラスターにどのようなイメージを持っていたかをあげる。

クラスター 1 は“lots of study and homework”から“medical support”までの11項目：  
 「サポートがあったら、がんばったら、大変な時も越えられます。留学はたいへんなところがあるから、ほかの人からのサポートと自分ががんばったら大丈夫。そのプレッシャーで失敗したら、なんで留学したのと思うけど、留学生みんなは失敗することがあるから、次から学んだり、次から同じ失敗をしないようになる。時々失敗しても大丈夫だというイメージ」

さらに、クラスター 1 は二つの下位グループに分割することができ、“lots of study and homework”から“the more you fail the better success feels”までについては、「勉強とプレッシャーと失敗について。一生懸命がんばったら、明日は新しい日。今日間違っても明日は新しい一日になる」、 “you are different all the time”から“medical support”までについては「自分のイメージ。ほかの人は私を見たら私の自分のイメージと変わるんです。それはローズじゃなくて〇〇国のローズ。日本人は、難しいことを言ったらたぶん私がいわからなさそうと思うことが多くて、私は日本語が下手だと思ったけど、自分の問題じゃなくて、外国人は難しいことがわからなさそうだと思うから」と述べている。

クラスター 2 は“help meeting more people”から“someone to tell worries or problems to”までの 8 項目：

「友達とのつながり。留学は『学』だけど、勉強だけではなくて、留学して、周りの人とのつながりは一番大事なことだと思います。留学生でも、日本人学生でも、先生でも、町の人でも、関係があったら、ほんとにほかの言語も使ったりしてその人の考え方もわかるようになる」

クラスター2も二つの下位グループからなっており、“help meeting more people”から“making friends is no easier or harder than back home”までについては「一般的なイメージ」、 “friends and enemies are found in surprising places”から“someone to tell worries or problems to”までについては「一般的の反対。留学生と友達の個別なイメージ」と述べている。

クラスターについての質問の後、補足質問として下の項目についての意味を確認した。

“perfect student”：「いつも宿題を出したり、テストでもいい点数を取ったり、授業を欠席しなくて、いい学生はいい成績をとるんです」

“you are different all the time”：「もし日本人友達と一緒にいたら本当に同じじゃない。日本人と私は外国人ですから、仲良くなっても日本人じゃないから、外国に行ったことなかったら、ときどき人はカルチャーショックみたいな感じがあって、みんな私を見たときに、最初に思うのは『留学生です、外国人です』。みんな私を見るとそう思う、と思ったが、本当にふつうなこと。日本にいと、いつも『外国人の～』と思われるということ」

“people expect you to not understand”：「最初は、よかった、留学生だからみんなゆっくり話してよかったと思った。ただ、長い間日本にいたら、自分の日本語能力に自信がある人は、『どうしてみんないつもゆっくり話して、私わかるのに』と思う。最初じゃなくて、何か月もたったときに、そんな人が難しいこともわかると思うけど、留学生ですから、人はかんたんに話す。私はかんたんでよかったと思う」

“friends and enemies are found in surprising places”：「前に、クラスメートとか友達作りたと思ったけど、ほんとうによく都留で話す人は前に言ったカラオケの店員さん。よく行くんですから、よく話ができる。クラスメートより。大学生しか友達が作れないというわけではないという意味です。敵も、それもたぶん思わぬところにいそうです。まだ会っていませんが。留学しても、違う国ですけど、私の日常。自分の国にも留学先の日本でも、敵もいるかもしれない。自然に人の関係ができそうです。大学生だけじゃなくて」

#### 4-3 総合的解釈

第1クラスターの全体のイメージは、留学のプレッシャー、勉強のプレッシャーやいい



学生になりたいという希望が入り混じる中、留学しても、自分は本質的には留学する前と変わらないから失敗もたくさんするが、その失敗から学んでがんばったら大丈夫だろうという、前向きな志向である。

このクラスターはローズの解釈では、勉強とプレッシャーと失敗についての前半6項目と、本当の自分とまわりの人が自分に対して持っているイメージの違いについての後半5項目に分けられる。

ローズは非常にまじめな学生で、特に「いい学生」「完璧な学生」(perfect student)になりたい、ならなくてははいけないと感じていた。彼女にとって「いい学生」というのは、まじめで、授業にもすべて出席し、宿題や課題を期日までにこなし、いい成績を取る学生のことをさしている。ローズの留学への考え方や勉強への取り組み方に加えて、新しく協定を結んだ大学からの初めての交換留学生であったため、特に「いい学生」「完璧な学生」にならなくてははいけないといプレッシャーが強かったようである。

さらに失敗することに対しての項目が重要度順で1位から3位を占め(表2)、ローズ自身もこの三つの項目が一番大事だと述べており、ローズが失敗に対して強い意識を持っていることがうかがえる。ローズのいう失敗とは、テストでいい成績が取れなかったり、日本語を間違ったりすることや、一人だけ忘れ物をしてしまったり、教師の質問に答えられなかったりすることであった。ローズがあげた項目は失敗への恐れではなく、いずれも肯定的な表現になっている。ローズによると、これらは昔から持っていたイメージで、失敗したらがんばればいと思っていたが、実際に失敗してしまったときはパニックになったり、落ち込んだりして、頭では理解していてもなかなか実行することは難しかったという。それが、留学の経験を通して、留学生なので日本語で間違ふことはよくあるし、もし気にしすぎたら誰とも話せなくなる。間違いがあってももっと話したり勉強したりしたほうがいい、100%正しくなくても、完璧じゃなくても大丈夫、間違いがあってもがんばったら大丈夫だという考え方が本当にできるように変わったということであった。

日本人が自分を外国人だとみて、日本語がわからないだろうからと日本語を簡単にしたり、ゆっくり話したりすることについても触れている。日本語学習者、特に日本語に自信を持っている学習者はこれについて不快に感じるケースもある。ローズも少なからずそう感じているようであるが、それは自分の問題ではなく、どこの国でも外国人に対して人が考える普通のことであり、日本語を簡単にわかりやすくしてもらえることは、自分にとってはよかったと感じているようだ。

大学や友達からのサポート、特に医療支援が大切であること、医療支援と言っても専門医を探すなどのほかには専門的なものを大学側に要求しているのではなく、大学がローズの病状を理解することが大切であると考えている。特に教員がローズの病気について知らず、ただ単に怠惰な学生だと思われることには恐怖心に近いものを持っており、もし大学がローズの病気や薬のことについてまったく知らず、理解がなかったらたいへんだだろうとも述べている。

自分は留学しても変わらない自分なのに、自分を通して日本人が「〇〇国人」とはどういう人かと判断してしまい、自分の持っている自分とは違ったイメージを持たれることや、出身国の代表のように思われてしまうことへの戸惑い、失敗することへの恐れ、勉強や友達作りなどさまざまな悩みがある中、健康な状態で留学したとしても留学生はたいへ

んなので、病気であるローズは病気に関しての悩みが少なくなれば、もっと他の大切なことに集中できるのではと述べている。

イメージとしてはマイナスのイメージの項目が多いが、勉強や「いい学生」にならなくてはいけないというプレッシャー、ほかの人からの期待、どうしても外国人としてみられてしまう現状、すべてについて、ローズは、たいへんそうだが、まわりからのサポートと自分の努力によってこれらを乗り越えられると述べている。

自由連想項目の中には出てきていないが、ローズは「いい学生」になりたいと思っていたが、「いい留学生」になればいいと考えるようになったとも言っていた。ローズにとって「いい学生」というのは学業面において完璧で、いい成績を取る学生のことであるが、「いい留学生」というのは必ずしも完璧である必要はない。「いい留学生」について、ローズは「いい学生といい留学生の意味が違う。いい留学生はなんでもがんばる。サークルも入ったり、留学生の活動をやったり、留学している町の人になる。チューターとほかの留学生と仲良くなったり、留学生のための授業以外の授業も取ったほうがいい。日本人のための授業だからいい成績は取れないと思うけど、経験としてはいいと思う。成績だけじゃない」と述べている。そして「前は一番いい学生になりたかった。今は一番いい私になりたいと変わった。いい変化」とも述べており、現在の自分を肯定的にとらえているようである。

第2クラスターでは一転してほかの人との関係についてのまとまりとなっている。前半部分(“help meeting people”から“making friends is no easier or harder than back home”)は一般的なことについて、後半部分(“friends are important for international student”から“someone to tell worries or problems to”)は個別のイメージとしてまとまっている。

留学は勉強だけではなく、人とのつながりが一番大事だということ、日本に留学していても日本人だけでなくほかの留学生と友達になることが大きなサポートになること、また大学生の友達だけでなく、住んでいる地域でも友達を作ることができたことなどを、ローズはインタビューで述べていた。特に同じ留学生の立場である友達とは同じ悩みを共有していることで、孤立感を解消することに役立っているようで、「日本人の友達は大切だが、留学生の友達も必要」だと述べている。

新しく友達を作るのはローズにとって母国でも難しく、日本に留学するのだからもちろん日本人と友達になるが、それはもっと難しいと考えていたローズだが、学生だけでなく学外で知り合いや友達が増えたこと、日本人学生だけでなくほかの留学生と友達になったことはローズにとっては新しい発見だったようである。これは連想項目の重要度順で5位に“friends and enemies are found in surprising places”、6位、7位に“friends are important for international students”“especially other international students who feel the same worries”があげられていることからもうかがえる(表2)。

母国で外交的な性格であれば留学しても友達をたくさん作ることは難しくないかもしれないが、ローズは自分でもシャイな性格だと言っており、母国でも友達を作るのが難しかったので、自分からどんどん話しかけてということはできず、友達を紹介してくれるようなサポートがあって、新しい人と出会うことがもっと簡単であれば助かると感じている

ようだった。

第1クラスターと第2クラスターの関係については、第1クラスターが留学に伴うさまざまな問題やそれを乗り越える可能性についてのイメージであるのに対し、第2クラスターはそれらの問題を克服するために必要なサポートの最も大きなものである人とのつながりについてのイメージとなっている。

#### 4-4 考察

ここでは PAC 分析の結果に加え、来日直後からのローズの様子を観察した記録と、帰国直前に行った半構造化インタビューの結果を補足資料として用いながら考察を行う。

##### 来日前、来日直後の状況

ローズが来日する前には、所属大学の障がい者支援の部署からの支援依頼文書や本人からの連絡を受け、ローズと交換留学の受け入れ担当者とのやりとりがあった。来日直後、受け入れ大学側（留学・国際交流室）は、これらの情報をもとに、保健センターの紹介、保健センターとの連携、医師との連携、病院への付き添い、専門医へのつなぎなどを行った。幸いにも、近隣の病院でローズの病気の症状について詳しい医師に診察してもらうことができ、必要な薬の処方についても問題なく行われた。

来日直後、7週間の日本語集中コースでは、ローズの状態について授業の担当教員に情報を提供し、授業中または課題の提出等についての配慮をお願いした。手首の痛みのため書くことが難しかったローズに筆ペンを紹介し、筆ペンで大きく書くことによって手首にできるだけ負担をかけないようにというのも日本語の担当教員からの配慮だった。

最初のころのローズは、これまでに日本滞在経験もあるため日本についての知識は他の留学生よりも持っていたが、クラス内で特に自主的な発言が多いというわけではなかった。この集中コース期間はほぼ毎日漢字の小テストがあるが、漢字については「書いて覚える」という方法が難しいためと、薬の副作用とで、かなり低い点数を取ることが多かった。

このころは非常に不安定な時期で、成績への不安、単位取得への不安、友達ができるかどうかについての不安と、チューターとの人間関係の確立がまだうまくできていなかったという状況で、私が把握している限りで3回、話したいと言って授業後に教室に残ったり留学・国際交流室に現れたりして毎回それぞれ1時間程度ずっと不安を繰り返し口にして泣いていた。専門のカウンセラーを紹介することも考えたが、1時間ほど泣いた後は少しすっきりした顔で帰って行ったので、そこまでの必要性があるかどうかの判断がつかず、留学・国際交流室のほかのメンバーにも相談の上、あとしばらく様子を見ることにして、カウンセラーへの紹介は行わなかった。

ローズの症状は多岐にわたるとともに、日によって症状が異なる。症状の重さは予測ができず、毎日朝起きたときに「今日はどうだろうか？」といつも考えると書いていた。一見病気も何もなくて元気そうに見える日もあれば、外に出るのがつらいくらい症状が重い日

もあるという。このため、自分がほかの人からどのように思われるのか、単に怠惰な学生だと思われるのではないかと危惧しているようであった。

病気の症状のひとつとして、非常に疲れやすいということがある。ローズは常に自分のエネルギーのレベルを考える必要があった。これについて、ローズは“spoon theory”（スプーン理論）というのを説明してくれた。一日にローズが使えるエネルギーはスプーンに5杯しかないので、それをどこで使うかを常に考えなくてはいけないというのだ。朝起きて朝食を作って食べ、着替えて、大学に行くのにスプーン3杯のエネルギーを使う。授業を受けると、それでもう2杯のエネルギーを消耗する。夜寝るまでのエネルギーはもうほとんど残っていない。大きなイベントがある場合は、その前日からエネルギーを使わずに残しておいて、かつ翌日のエネルギーも使ってしまう。急な誘いがあっても、その誘いを受けるだけのエネルギーの蓄積がなく、よくチューターから夕食会やパーティーに誘われても、それが当日の話となるとなかなか参加することができなかった。そのため、「ローズはいつ誘っても参加しない」「誘っても迷惑だと思われているのでは」「どうせ断ってくるから誘わないでおこう」と思われるのではないかと心配していた。ローズのケースでは、チューターに急に誘われても断らなくてはいけない事情を理解してもらい、できるだけ前もって予定を知らせておいてもらいたいと思っていた。大学の主催するパーティーや大きなイベントの場合はあらかじめ予定を立て前もって知らせておくのだが、留学生とチューターで昼食や夕食を一緒に作るような場合はその当日になって決まることも多く、ローズにとってはこれが非常に難しかったようである。

## ローズの変化

来日直後のローズは不安定で表情がかたかったが、留学期間の後半は表情が明るくなり、杖を使わずに大学に来ることも多くなった。日本人学生と昼休みに英語で話すセッションにも積極的に参加していた。

留学開始直後はかたくなに勉強が第一で、いい成績を取るいい学生になることだけが大切だと考えていたローズだった。そのため、当時は自分の体のコンディションで思ったように成果が上げられず、常にジレンマを抱えていたようだった。特に来日直後の不安定な時期には、泣きながら「成績が一番大切なのに、いい成績が取れなかったら私には何も残らない」と繰り返し話していた。

留学の意味を勉強以外に見いだせずにはいたローズが、第2クォーターで「留学は『学』だけど、勉強だけではなくて、留学して、まわりの人とのつながりは一番大事なことだと思います」と語っていたのは大きな変化だった。自分自身をシャイな性格だと思っており、高校時代の留学のときもそれほどたくさん友達ができなかったようで、来日直後は今回の留学でも友達ができるか不安を口にしていた。本学の交換留学生のためのプログラムは人的リソースが豊富で（岡部 2013）、学内のみでなく、学外や地域の人たちとの交流がふんだんに盛り込まれている。また、なかなか自分のチューターとの関係を構築できなかったローズには、当時はチューターではなかったが前年度チューターだった学生を紹介し、できるだけいろいろな人に出会えるように支援をした。このような状況が、ローズの

留学への考え方に変化をもたらしたのかもしれない。

また、これと関連して、目標とするのが「いい学生」から「いい留学生」へと変化したことも特記すべきことである。「いい学生」になりたいが、病気のため以前のように結果が出せず、もがいていたローズが、外国人留学生なのだから失敗するのは当たり前だ、「完璧な学生」ではなく「いい留学生」になればいいと気付き、成績へのこだわりがなくなることで、心理的に楽になったのではないかとと思われる。

失敗そのものについての考え方にも変化が見られた。連想項目としてあげられていた“making mistake every day and trying to do better tomorrow”や“learning to embrace mistakes and failure”、“the more you fail, the better success feel”は、昔から持っていたイメージだとローズは述べているが、来日直後の不安定な時期には失敗へのおそれをよく口にしていた。頭では理解していても、やはり失敗すると、これらの連想項目のように前向きに対処することは難しかったようである。実際に20点満点の漢字の小テストで数回続けて2点～5点しか取れなかった時に、これで日本語のクラスの単位が取れるかどうか不安になり、授業後に話したいと申し出てきて、成績への不安、そのほかいろいろなことに対する不安を口にして泣いたことがあった。本人も最初はテストで失敗した時はそれを乗り越えるのが難しかったと述べている。しかし失敗しても、完璧じゃなくても大丈夫、と本当に思えるように変わったようであった。同じように小テストで失敗しても、「できるだけ勉強したり、もし20点の5点あったら、『先週よりよかった、先週は3点だった』と、前よりよくなったことがうれしかった」と前向きに考えられるようになったという。これについても自分が目指すのが「いい学生」から「いい留学生」に変化したことで、完璧さへのこだわりがなくなったのではないかと考えられる。

一方、ローズは人とのつながりについて、最初の半年は交換留学生のための授業の履修がほとんどだったため、接するのがほかの交換留学生とチューターがほとんどだったと話している。イベントなどでいつもチューターと一緒にいるため、チューターと友達にならなくてはいけないというプレッシャーを感じていたという。授業でもイベントでもいつも同じグループでの参加だったので、たとえば一つの授業で宿題を忘れるなど恥ずかしい思いをした時に逃げ場がなく、ずっと恥ずかしい思いをしなければならなかったと言っていた。後半の半年になると、履修していた授業の半分程度は交換留学生のために作られた授業ではなく一般の日本人学生と一緒に授業を受けていた。そこでクラスメートと話をして友達になり、交換留学生とチューターの輪から一歩外に出るという体験をし、前半の半年に感じていたプレッシャーをさほど感じなくなったと言っていた。

ローズには手探り状態でその時点で必要と思われる支援をしてきたが、最終的にはローズの中での考え方の変化や環境の変化が大きく作用して明るく自信を持った留学生として成長した。人とのつながりが大切なこと、成績だけがすべてではなく失敗をしても大丈夫だから何事にも前向きに取り組もうという姿勢は、ローズが留学を通して学んだ大きなことではないだろうか。

帰国直前に行ったインタビューでは、自分の留学生生活を振り返り、自分には何が必要だったかを客観的に述べてくれた。特別なニーズのある学生はケースによって必要な支援が異なると思われるが、ここではローズが役に立ったと述べていたサポート、あればよかったと述べていたサポートについて以下にまとめる。

## 必要とされる支援

### 役に立ったサポート

#### 1. 受け入れ前の留学先の担当者との連絡

留学開始前に本学の教職員とメールで連絡を取り、直接都留の様子を聞いたり自分の状態を伝えたりしており、これは非常に役に立つサポートだったとローズは述べている。特に病気については、人によって異なる症状が出るため、本学と事前にコミュニケーションが取れ、結果として必要な薬の手配や病状を理解してくれる医師の診察を受けることにつながったとしている。

#### 2. メディカル・サポート

これには、来日してすぐに大学で医師と会えたこと、近隣の病院に行きローズの病状に詳しい医師の診察を受けられたこと、保険センターの存在などが、必要なサポートだったとローズは述べている。

#### 3. 教員との情報共有と、教員の自分の病気への理解

病名とともに症状を詳しく知っておいてもらうことで、ローズにとって不利益となるような事態（病気のせいではないことを「怠惰な学生」と誤って認識されてしまうこと）を防ぐことができると同時に、可能な範囲で必要に応じてワークロードの調整が可能となる。ローズは教師が病状を理解し、忘れ物をするなどの失敗があっても理解を示してくれたことがよかったと述べている。

#### 4. 話ができる人、話ができる場所の存在

特に不安定だった時期に教員や留学・国際交流室に話に来ることができたことで少し気持ちが楽になったようである。

#### 5. チューター以外の日本人学生の紹介

チューターとの関係がうまく構築できていない状況を知り、留学・国際交流室でネットワークを広げることを目的に以前チューターを経験した学生と引き合わせたことを言っていると考えられる。これまでも自分が興味があることについてチューターとは話ができないと訴えてきた学生に、同じ興味・関心の分野を共有しているであろうと思われる本学の学生を紹介したケースもあった。

### 今後考える必要があると思われるサポート

#### 1. イベントの予定を早めに組んで留学生に周知すること

大学側で主催するイベントについてはできるだけ予定を早めに組むことは心がけているが、大学外部と関係があるものについては、相手の事情等により、直前になってイベントの予定が決定したり変更になったりすることもある。特にローズ

のように自分のエネルギーを自分で配分する必要があるような学生がいる場合には、できるだけ早く予定を知らせるよう配慮する必要がある。

## 2. チューターである学生への対応

教員と異なり、チューターには病名や病気についての詳しい情報は知らせる必要はないとローズは考えていた。本学のチューター制度は、1対1のチューターではなく、担当チューターはいるが、チューター全員で留学生全員を支援するというかたちになっている（岡部 2013）。個人情報でもあるローズの病気についての情報を、チューター全員に知らせる必要はないと思われる。しかし、急な誘いを受けられない理由として、「とても疲れやすい」「いろいろなことを忘れることがよくある」程度の情報は伝えておいてほしい、それ以上の説明を求められたら、自分自身であるかどうか判断して行うということだった。これについてはどう考えるかは個人差もあると考えられ、個別のケースごとに考える必要があるであろう。

## 3. チューターだけでなく、日本人学生とのネットワークが広げられる仕組み

ローズはチューターのシステム自体はとて素晴らしいもので、チューターがいるから本学に来たいという学生もいるし、チューターはとて素晴らしいサポートになると話した上で、親しくなれるかはチューターの性格やどれくらい会えるかにもより、特に最初の半年間はチューター以外の日本人との接触がほとんどなかったため、チューターと仲良くなりなくてはいけない、友達にならなくてはいけないというプレッシャーも強く感じたと言っていた。特にあまり外交的でない学生の場合、チューターと留学生の閉じたグループになってしまいがちで、それを苦痛に感じる留学生もいるということである。ローズの場合、後半の半年間は日本人学生と一緒に授業も履修していてネットワークも広がったため、そのプレッシャーは少なくなったようである。

## 4. 成績への不安を感じる留学生に対する対処

いい成績が取れるかどうか、単位を落とさないで帰国できるかどうか不安に感じている留学生が多く、特に英語圏の留学生の場合は1学期間という短いスパンなので、前からいる留学生に聞くこともできない。不安を解消するために、都留での成績のつけ方や、どういう場合に単位を落とすことになるか等、くわしく話をするなどの対処が必要ではないかという意見がローズから出た。

## 5. 保健センターの所在や、カウンセリングを受けられることの周知

ローズのケースでは、保健センターがどこにあるかは来日直後に案内し、連携を図ったが、カウンセリングについてはその機会があることを帰国直前まで知らなかったと言っていた。交換留学生は学内の情報をうまく取得できないことがあることを考慮し、対応した教職員にとって必要があるかどうか判断がつかない場合でも、これらの情報を前もって周知する必要があると考えられる。

## 5. 特別な支援・配慮を必要とする留学生への対応—今後の支援体制の方向性—

特別な支援や配慮を必要とする交換留学生の場合、本人が求める支援や配慮が多岐にわたる可能性があり、すべての留学生に対応できるマニュアルは存在していない。交換留学生自身の不安解消のためと、受け入れの初動態勢を整えるため、来日する前からコミュニケーションをとり、準備ができるところは前もって準備しておくことが役に立つと考えられる。

授業担当教員やチューターである日本人学生とどの程度情報を共有するかについては、ローズの場合、教員には自分の持つ症状を理解してもらうことやワークロードの調整のため、病名や症状について情報を提供しておくことが必要だが、チューターについては「病気のためにとっても疲れやすかったり、いろいろなことを忘れてしまう」という程度の情報のみでいいと考えていた。これには病気や障がいの程度や症状、本人の考え方など個人差があると考えられる。今後は個々のケースについて考えていかななくてはならない。

受け入れ後の相談態勢の整備、保健センターやカウンセリングについての情報の周知も必要であると考えられる。話をしに来ることができる場所や人の確保は、現在のところ本学では留学・国際交流室で担うことが多いが、本来ならカウンセリングの訓練を受けた専門家が望ましいのではないかと考えられる。日本語で意思疎通ができる留学生の場合はカウンセリングのシステムを紹介することもできるが、英語で話したいという学生の場合の対処は今後の課題となるかもしれない。

本学ではチューター制度が充実しており、他大学の場合に比べて日本人学生（主にチューター）と接する機会を多く提供している。実際、交換留学生とチューターとの間に密接な友人関係を構築して、帰国後も連絡を取り合ったり、再び都留を訪れたりする交換留学生も多い。しかし、このようなケースがある反面、交換留学生とチューターとの閉じた関係になってしまうことには弊害もあると考えられ、交換留学生が独自にチューター以外にネットワークを広げられるよう配慮することが求められるかもしれない。

## 6. おわりに

本学では、さまざまな障がいを持つ学生について大学全体での組織的な対応の体制はいまだ構築されておらず、交換留学生についても、現在の状況は、国際交流関係の部署（主に留学・国際交流室）が保健センターなどの学内のほかの部署と、交換留学生の日本語プログラム担当である筆者や日本語の教員との連携のなか、それぞれの学生への対応を行っている。しかし、一部署単独での対応には限界があるとともに、特別な支援を必要とする留学生支援についての知識や技術を持った教職員もいない。これからもローズのような学生を受け入れる可能性がある中、今後どのように対応していくのかを考えなくてはならない。

今回の PAC 分析によって比較的前向きな結果が出たのは、ローズに PAC 分析に協力し



てもらったのが留学期間の終盤で、落ち着いている時期だったからかもしれない。来日直後は不安定な時期で、研究に協力してもらっただけの余裕がローズ自身になかったと判断したからだが、本当であればその時期にこそ、どのような問題があり、どのような支援が必要なのかが明確に結果として現れたかもしれない。今後、特別な支援が必要な学生には、その学生の状態を考慮した上で、支援体制の構築に向けての情報提供に協力してもらい、今後の支援の方向性を考えていきたい。

## 引用文献

- 池田庸子 2004 「学習障害（LD）を持つ留学生の受入と支援」『日本語教育』120号、日本語教育学会
- 井村倫子 2007 「学習障害をもつ留学生への個人・組織的対応に関する一考察：日米大学における支援の対象から」『一橋大学留学生センター紀要』10.
- 上田和子 2003 「日本語能力試験における障害者受験特別措置対応の現状と課題」『日本語国際センター紀要』13. 国際交流基金
- 岡部真理子 2013 「JAST プログラムの特徴と留学生の学習環境についての考察」『外国語研究紀要』Vol. 8. 都留文科大学国際交流センター
- 北川幸子 2014 「視覚障害をもつ日本語学習者への指導の工夫：教授法と教材教具」『日本語教育方法研究会会誌』21(1).
- 北川幸子 2015 「視覚障害をもつ留学生受け入れの課題 —京都外国語大学における授業外支援の取り組み—」『国際言語文化』1.
- 坂根洋子 2000 「留学生教育における学習障害者への取り組み」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』10.
- 内藤哲雄 2012 『PAC 分析実施法入門 [改訂版]』ナカニシヤ出版
- 中川康弘 2009 「LD・ADHD 日本語学習者支援に関する一考察 —1 学期間における担当教師 2 名の事例から—」『留学生教育』14. 留学生教育学会
- (独) 日本学生支援機構 2016 『平成27年度（2015年度）大学、短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の就学支援に関する実態調査結果報告書』

付表1 連想項目間の非類似度距離行列

非類似度	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
1	0.0																		
2	12.4	0.0																	
3	38.2	40.0	0.0																
4	100.0	79.3	100.0	0.0															
5	100.0	80.0	100.0	100.0	0.0														
6	100.0	100.0	100.0	100.0	45.1	0.0													
7	100.0	100.0	100.0	100.0	80.0	9.5	0.0												
8	100.0	100.0	100.0	59.3	100.0	100.0	100.0	0.0											
9	100.0	82.2	100.0	70.0	80.0	61.5	100.0	100.0	0.0										
10	100.0	100.0	100.0	76.4	100.0	100.0	100.0	100.0	40.0	0.0									
11	84.8	62.6	70.2	91.0	100.0	100.0	89.1	100.0	40.0	80.0	0.0								
12	100.0	90.0	88.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0							
13	100.0	100.0	91.7	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.1	0.0						
14	100.0	100.0	100.0	100.0	80.0	80.0	90.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	0.0					
15	100.0	92.4	100.0	100.0	100.0	50.0	62.6	100.0	100.0	100.0	90.0	100.0	100.0	100.0	0.0				
16	100.0	100.0	100.0	100.0	70.0	45.5	90.0	100.0	45.5	93.9	100.0	100.0	100.0	72.0	100.0	0.0			
17	63.3	100.0	100.0	76.4	45.1	90.0	100.0	100.0	81.9	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	80.0	0.0		
18	100.0	100.0	100.0	69.9	70.0	70.0	100.0	100.0	63.3	100.0	85.1	100.0	100.0	94.6	59.0	8.8	100.0	0.0	
19	100.0	100.0	92.4	73.1	100.0	100.0	80.0	100.0	80.0	69.9	80.0	40.0	34.6	100.0	100.0	100.0	100.0	60.0	0.0

項目の数値は重要順位

Received : October, 5, 2016

Accepted : November, 9, 2016